第一一二回碌山忌記念講演会

宮内良助の人生と《宮内氏像》の旅

郡司美枝

日時：令和四年四月二十二日（金）十三時半～
会場：杜江館二階

只今、ご丁寧な紹介にあずかりました郡司美枝でございます。よろしくお願いいたします。《宮内氏像》のモデルである宮内良助の曾孫に当たります。大学・大学院とずっと日本近代史を勉強してまいりまして、六年前の二〇一六年に、三冊目の本なのですが、恥ずかしながら自分の家のこと、曾祖父から父までの三代にわたる宮内家の歴史について本を出しました。そのとき、こちらにもおうかがいして、当時の館長さんの五十嵐久雄さんからも参考になるおはなしを沢山聞かせていただきました。そんなご縁もありまして、昨年、実家の宮内家から寄贈しました《宮内氏像》の公開を機に、おはなしをする機会をいただきました。短い時間ですが、おつきあいいただきたいと思います。

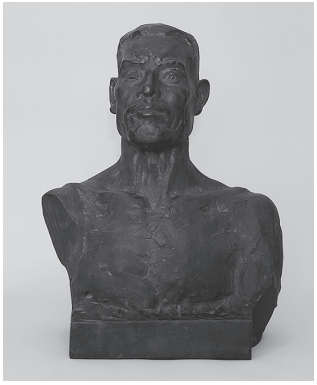
一、宮内良助の人生　―日本橋で帽子商として大成功して……

日本橋の商人として

まず、《宮内氏像》（写真①）のモデルであり、制作費の出資者でもある宮内良助（写真②）の人生を紹介したいと思います。

宮内良助は、明治二（一八六九）年に、千葉県の柏井村（現・市川市）で代々名主を務める裕福な農家である植草家の当主、植草治左衛門（写真③）の三男に生まれます。明治十四年、十二歳のときに宮内軍治という人の養子になります。

なぜ養子になったかといいますと、三男ですので養子に出るのはそれほど不思議なことではありませんが、目的は徴兵逃れだったようです。明治維新を経て成立した明治政府は、近代国家建設の一環として国民皆兵を柱とする近代軍の創設をはかって明治六年に徴兵令を出します。しかし、この徴兵令は、明治二十二年に大改正されるまでひどいザル法でした。いろんな逃げ道があったのです。良助が養子になった当時の徴兵令ですと、一家の戸主や戸主


写真①
《宮内氏像》

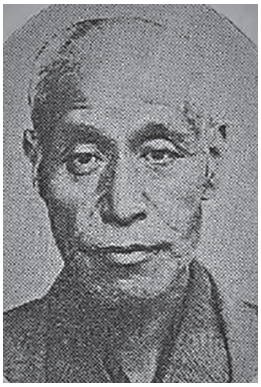
写真②
宮内良助と孫の良雄
昭和５年

写真③
植草治左衛門

になる長男や孫などは兵役を免除されるという免役条項がありました。が、良助はそれに該当しない。そこで、子供がいなかった宮内軍治の戸籍上だけの養子となり、良助が宮内家の嗣子となることで徴兵を免れたのでした。いわゆる「兵隊養子」というものです。

しかし、この手段をつかうと、元の戸籍の家から出なくてはならなかったため、父や兄たちが、東京の日本橋区田所町の店を入手し、良助に「植草屋」という屋号をもつ西洋小間物屋を始めさせたようです。十歳違いの長兄である栄一（写真④）は、築地の居留地で英語を学んだり、キリスト教に接したりするなど進取の気性と向学心のある人だったようで、その築地でそれまでの日本にはなかった西洋の小間物である石鹸、靴墨、洋傘、帽子、写真アルバムなどに出会い、こうした物を商うことに強い関心をもっていたようです。弟が商売を始めるにあたって、西洋小間物をあつかうことを推奨したのだと思われます。ただ、十二歳という年齢を考えても、実家の方で腕のいい番頭をつけたのだと思いますが、私の父、良助にとって孫になりますが、良雄のはなしでは「かなり商売が好きだったみたいで、隠居してからも、隠居所に隣接した店舗で小僧をつかって小商いをやっていた」ということですので、良助は商売が好きだったし、商才もかなりあったのだと思います。

その後は、順調に商売を大きくしていきます。それにともなって、店の場所を日本橋の問屋街のはずれから中心の通塩町に移し、明治二十七年、日清戦争が始まった年ですが、この年に通塩町八番地、現在の中央区日本橋横山町三番地十の地に大きな店を構えます。今でも宮内家はここを本籍地としていますので、宮内家にとって栄光の地だったのだろうと思います。現在、敷地面積百坪程の日清紡のビル（ＮＢ日本橋ビル）が建っていますが、その後の経緯をみていくと、たぶんその南半分が植草屋の店の敷地だったのだと思います。



写真④
植草栄一
『千葉県議会史　議員名鑑』より

このように、良助は順調に商売を大きくしていきました。さらに経済面だけではなく、明治二十八年には第四回内国勧業博覧会に写真アルバムと石鹸などを出品して進歩三等を受賞しますし、明治三十六年の第五回内国勧業博覧会にも写真アルバムを出して三等を受賞するというように商売の内容も充実させていき、どんどん商人として大きくなっていきました。さらに明治四十四年には帝国製帽株式会社という静岡にある帽子製造会社と特約店契約を結び、中折帽を引き受けて小売りに出す卸業者としての地位を確かなものにしていきます。

写真（⑤）は明治三十八年のものです。良助や長男の治良がつけている勲章は、その勧業博覧会で得たメダルのようです。良助は羽織袴に山高帽、息子治良のは、ちょうど、日露戦争のときなので軍帽を模したものですね。良助の三人の息子たちの写真（⑥）も、高そう

写真⑤
宮内良助と長男の治良
明治38年

写真⑥
治良（中央）・良次（右）・達雄（左）
明治39年

な帽子をかぶっています。ちなみに、この翌年、長男治良は慶應義塾の小学校である慶應幼稚舎に入学するように、バリバリのお坊ちゃんとして育てられていたようです。

こうやって宮内家は商売を拡大しながら、西洋小間物から徐々に帽子の卸業者に変わっていきました。

帽子は近代化（西洋化）の簡単アイテム

ここで、帽子というものについて、なぜ明治中期以降に日本の帽子業界が大きく発展していったのかをおはなししたいと思います。良助もそうですし、碌山の兄の荻原本十もそうですが、当時なぜ帽子という商売が上手くいく状況だったのでしょうか。

明治政府は近代化をすすめていきますが、その近代化はイコール西洋化でした。「脱亜入欧」つまり遅れたアジアから脱して進んだ欧米の仲間入りを果たすというのが明治政府の目標でした。そして人々にもそれを課していきます。江戸時代までは庶民は年貢さえ納めてさえいれば為政者にとってどうでもいい存在だったのですが、近代国家になるとそういうわけにはいかない。たとえば徴兵令もそうですが、国民皆兵主義をとっていますから、一人一人に「国民」としての自覚をもってもらわないと困るというのが近代国家です。したがって近代国家の構成員である「国民」には、西洋の服装である洋服を着るように勧めます。丁髷を切る断髪令を出し、天皇にも衣冠束帯をやめさせ軍服を着せる。皇后にも十二単をやめさせてドレスを着せる。とはいえ和服に慣れ親しんできた人々にとって洋服は非常に高いハードルでした。今の私たちに常に和服で生活しなさいというようなものです。接したことのない衣装を身につけることはすごく難しく、たとえば初期の「軍隊手帳」には下着の着方からが事細かく図解されていました。さらに習俗的な問題だけでなく、当初、洋服は高価なものでしたから経済的にも大変です。上着やズボン・シャツだけでなく下着やベルト・靴や靴下まで、全部揃えるのは大きな経済的負担がありました。

ということで、考え出されたのが帽子をかぶることでした。帽子をひとつ買って頭に乗っければ、とりあえず西洋化になります。つまり、多くの庶民、特に男性にとって、この頃の帽子というのは手っ取り早い近代化の象徴、西洋化のアイテムだったのです。小学校でも、着物は和服の時代でも男の子たちは学帽をかぶりました。その名残は後々までつづき、私が通っていた小学校でも男女とも私服でしたが、なぜか男の子たちだけは学帽をかぶって通学していました。長崎のおくんちや東京浅草の三社祭の役員たちは、今でも着物に袴をはいて山高帽やカンカン帽をかぶります。碌山が大事そうに手にもって写真⑦に写っている山高帽は、お兄さんの本十さんより贈られたものだったのかもしれません。

とにかく、戦前の都市の男性は外出の際は必ず帽子をかぶっていました。昭和五（一九三〇）年に東京駅で暴漢に襲われたときの浜口雄幸首相の写真を見ると、周りの人々はみんな帽子をかぶっています。ところが、戦後、急速にその風潮がなくなります。昭和三十九年、一回目の東京オリンピックが開催された同じ年に新幹線も開業しますが、この時の写真をみると同じ東京駅でも、駅員以外で帽子をかぶっている人はいません。このように帽子は戦前まで需要が高かったので

写真⑦
山高帽を手にもつ守衛
明治26年頃

すが、戦後の高度経済成長期に急速に廃れてしまいます。

こうした時代のなかで、宮内良助は、当初、西洋小間物商として様々なものをあつかっていたようですが、徐々に帽子に特化していきます。紳士用の中折帽などを、下職を使って作らせて小売に卸す卸業者として事業を拡充するとともに、明治四十四（一九一一）年には、帝国製帽株式会社と特約店契約を果たします。ちなみに、帝国製帽は静岡県の浜松にある会社で、当時から戦後までフェルト製の中折帽の製造において日本を代表していました。

辛亥革命と《宮内氏像》の誕生

こうして近代化進展とともに日本に帽子が定着していくなかで、明治三十七（一九〇四）年に日露戦争がおこります。莫大な戦費を使ったにもかかわらず賠償金は取れず、結果、戦後恐慌をおこし、日本橋の問屋街でも半分の店が破綻をしたといわれています。しかし、帽子業界は明治四十年頃より更に業績をのばしていくのですが、それは中国における辛亥革命（一九一一）と関係していました。

清朝をつぶして近代国家をつくろうというのが辛亥革命です。清朝は騎馬民族である満洲族がうち立てた国で、漢民族の国家ではありませんでした。男性は辮髪という髪を長くのばし三つ編みにする髪型を強制されます。ところが、アヘン戦争（一八四〇～四二）の敗北以降、列強に侵食されていく国を憂い、清朝を倒し近代国家を打立てようそうとする人々がでてきます。そうしたなかで、孫文などの革命リーダーたちは、髪を短く切り帽子をかぶることで清朝の政策を否定し近代化を目指しました。辛亥革命に向かって、その動きは徐々に高まり、革命成功後の一九一二年二月に清朝が滅亡すると一層多くの中国人が髪を切り帽子をかぶるようになっていきました。当時の中国の人口は五億人といわれています。半分が男性ですから、単純に考えても二億個以上の帽子需要が発生したことになります。今も中国は日本の十倍くらいの人口がいますけれども、日本は当時五千万人くらい。孫文らの活躍により近代化＝西洋化の気運が高まることで、中国に巨大な帽子市場が出現していったのでした。

中国の裕福な人々にはイタリア製などの高級帽子が好まれていたようですが、安価でそこそこの質をもつ日本産の帽子の需要は大きく、日本の帽子業界は空前の好景気になっていきました。良助も、その波に乗って商売を急拡大し、帝国製帽との契約をしていくということになったわけです。

そんななかで良助は、碌山の二番目のお兄さんの本十さんより、弟の碌山に肖像銅像の制作依頼をして欲しいと頼まれたようです。

本十さん（写真⑧）は、農業に従事することを嫌って東京に出て、神田久右衛門町の帽子付属原料商の大川屋石原弥七に入店し修業をつみ、明治三十八年に浅草橋近くで帽子の付属商として独立します。特に中折帽の付属品である帽子の裏地、飾りのリボン、内側の汗止めのリボンなどをあつかっていました。そして東京で屈指の帽子材料商となっていくなかで、良助と知り合うことになったのだと思います。

本十さんより五歳年上だった良助が、いつ頃から本十さんとつきあい始めたのか詳しいことはわりませんが、父のはなしでは家族

写真⑧
荻原本十・たま夫妻と守衛（中央）
明治34年

ぐるみのつきあいで、本十さんのところに遊びに行くこともあったようです。本十さんの奥さん、最初の奥さんのたまさんは産後の肥立ちが悪く亡くなってしまい、再婚したやまさんを父は見知っていたようです。父の記憶だと、やまさんは髪を頭上に大きく結い上げ前歯に金歯を入れていたので、子供の頃の父やその弟妹たちは、ひそかに「お獅子」（正月の獅子舞の「獅子」）とあだなで呼んでいたと、懐かしそうにはなしていました。それほどに親しい仲だったようです。

また、昭和の統制経済の時代、荻原さんが設立した荻原工業有限会社の代表取締役を良助の息子の治良が務めていて、太平洋戦争末期に荻原さん一家が穂高に疎開して以降は、荻原商店の店番を宮内家の店員であった長谷川がやっていたそうです。

そんな親しい付合いのなかで、良助は、本十さんより、碌山への経済的支援のため、肖像彫刻の制作依頼を弟にしてくれるよう頼まれたのではないかと思われます。当時、《女》のモデルといわれる新宿中村屋の相馬黒光との関係に悩む弟をまえに、本十さんは、中村屋と距離を置くことを模索していたといわれております。まず、自らも会員である東京帽子商工会より寄贈するという形ではなしをまとめ、会長である北條寅吉の胸像を制作させます。それが明治四十二年に完成すると、今度は、親しい付合いがあり、なおかつ商売を順調にのばしていた良助に、肖像胸像制作のはなしをもってきたのだと思われます。

《宮内氏像》の制作依頼については「厄年説」がありますが、一番の理由は、この時期の宮内良助の商売が大きく業績をのばし、お金がいっぱいあった、金回りがよかった、これに尽きると私は思っています。本十さんは、最も親しい商売仲間の良助が大いに儲かっていたが故に、弟碌山への作品制作を介しての経済支援を頼みやすかったのだと思いますし、良助も承諾したのでしょう。どんなに親しい友人の願い事でも、お金がなければ動かないのが商人であり、逆に儲かっているときは、直接商売に関係しないことにも出資するのが商人のひとつのあり方のようで、父もそういうところはハッキリしていました。

ついでにいうと、碌山自身も、良助の金回りのよさを知っていたのだと思います。知人の画家であり書家でもあった中村不折を良助に紹介したと思われるからです。不折は、碌山の墓碑銘や新宿中村屋・宮坂酒造の真澄・神州一味噌などのロゴを書いた人で、辛亥革命がすすむなかで中国での古い文物の散逸を危惧して中国の書を大量に購入して収集し、東京日暮里町の自宅に書道博物館を開きます。現在は台東区立になっていますが、紙に書かれたものだけでなく甲骨文字や文字が刻まれた青銅器などもあります。

碌山は、この宮内良助なら不折をも支援してくれると思ったのでしょうし、実際、良助は不折に資金援助をしたのでしょう。そのお礼だったと思われる「為書」のある中村不折の書「最後之勝利」「雲高気静」の二点が宮内家に伝わっています。これらも今回碌山美術館に寄贈いたしました（写真⑨）。

ついでに、その後の宮内良助についておはなししますと、空前のバブル景気のような日本帽子業界は、供給過多によって大正に入って急速にブレーキがかかっていきます。良助も上海にある倉庫に大量の在庫を抱え、その始末に奔走しますが、大正四（一九一五）年

写真⑨
中村不折の書・寄贈前の記念写真
令和３年

に破産します。日本橋の土地と建物を処分して負債を整理し、浅草橋駅近くの小さな貸店舗に移り住みます。つまり辛亥革命の成功が数年早かったら、あるいは碌山のヨーロッパからの帰国が数年遅かったら、《宮内氏像》は制作されなかったことになります。本十さんの依頼が良助の経済的絶頂期と重なったからこそ、《宮内氏像》は誕生したのです。

二、《宮内氏像》の旅

銅像制作と日英博覧会への出品

私は生まれたときからずっと埼玉県の大宮駅近くにある家に住んでいて、二十一歳のときに一家で東京に引越すのですが、それまで《宮内氏像》は自宅の庭に置かれていました（写真⑩）。私が子供時代、親や叔母たちから「《おじいさん》――《宮内氏像》のことを、我が家では《おじいさん》と呼んでいます――《おじいさん》はロンドンまで行ったことがあるんだよ」と折に触れて聞かされてきました。その頃の宮内家には一人も海外旅行経験者はおらず、銅像に対してですが、「いいなぁ」「私も行ってみたいなぁ」「ロンドンってどんなところだろう」と思ったものでした。

写真⑩
大宮の庭に置かれた《宮内氏像》
昭和50年・加倉田信也撮影

《宮内氏像》がロンドンに行ったのは、日英博覧会に展示するためでした。日英博覧会は日英同盟とからんで、日露戦争の勝利によって一等国となったことをヨーロッパで誇示するために開かれた博覧会で、日本紹介の意味合いから古い美術品、御物や国宝も反対の声が上がるなかで出品されるとともに、現代美術も展示されることになります。

ここで、《宮内氏像》の制作からロンドン行きまでを時系列的に追っていくこととします。

明治四十二（一九〇九）年五月六日、日英博覧会出品協会から東京市内の美術家に対して「新美術の部」に作品出展の勧誘が行われました。九月に締切があり、十二月五・六日に出品物の鑑査が行われたところ合格数にかなりの不足が出てしまい、出品協会から絵画の竹内栖鳳・黒田清輝などとともに、彫刻分野では唯一ひとり碌山に出品が依頼されます。

それより前の十一月頃、碌山によって油絵の《宮内氏像》が制作されています。宮内良助の性格がわからないということで描かれたそうです。ということですから、日英博覧会の出品依頼より前に、胸像制作の依頼があったことがわかります。明治四十二年の年末に《宮内氏像》の粘土像が仕上がり、早々に石膏像がつくられます。翌四十三年の年明け一月十五日には同郷の後輩、山本安曇によって鋳造され《宮内氏像》が完成します。これは碌山の安曇宛の葉書の日付でわかります。

その一か月後の二月十五日は、日英博覧会の会場のあるロンドンへ送致のため、依頼した作品が横浜港に到着する最終期日でした。こうして《宮内氏像》は横浜港から日本郵船の船に積まれ、五月十四日にオープンする日英博覧会に展示されるためイギリスに向かいます。その間、制作者である碌山は、新宿中村屋で吐血し、四月二十二日に亡くなります。

ここで注目したいのは、碌山が日英博覧会に出展を依頼され、出港まで二か月ちょっとしかないという日程的にかなり厳しいなかで、制作中

の《宮内氏像》を出品することを決め、鋳造を後輩に依頼して、期日に間に合わせて出したということです。人物が把握しにくいといって良助の肖像をまず油絵で描いたといわれており、最終的に恩師ロダンの作品《ジャン＝ポール・ローランスの胸像》によく似た腕のない裸体の胸像を作り上げ、日英博覧会に出品させました。

私は美術の専門家ではないし、碌山の作品についても素人ですが、碌山の作品群のなかで《宮内氏像》を考えるにあたっては、この点に注目していただくと面白いのではないかと思っております。つまり、師匠であるロダンの作品《ジャン＝ポール・ローランスの胸像》によく似せた作品を、その作品を目にする人々が日本よりずっと多いヨーロッパで開かれる展覧会に出そうとしたことに意味があるように思われるのです。だいたい依頼の肖像銅像に服を着せない、裸像というのはかなり珍しいのではないでしょうか。《北條虎吉像》は着物を着ています。そういう点から考えても、良助は依頼者の思惑を配慮しなくてはならないような注文主ではなかったといえましょう。《宮内氏像》は芸術性が優先され、碌山の意図が強く反映された作品だったのではないでしょうか。今後の碌山の彫刻に対する考えを検討する材料にしていただけたらと思います。

ちなみに、《宮内氏像》というネーミングは、碌山が付けたものではなかったと思われます。日英博覧会出品協会より新美術の彫刻の分野で記念賞を受賞していますが、『日英博覧会授賞人名録』という冊子には、出品人を「東京　荻原守衛」、品名には「銅像　自作」と記され、《宮内氏像》とはありません。また、像の背面には「宮内良助　当時四十二才09　碌山」と彫られています。したがって碌山本人がネーミングしていたら、《北條虎吉像》同様に《宮内良助像》になっていたのではないかと思われます。

日英博覧会の開催は約五か月間で、十月二十九日に閉幕します。閉会後、送還品は荷造りに一か月を要し、三回に分けて日本郵船の船便で日本に戻ります。《宮内氏像》も明治四十四年の早春以降に横浜港に戻り、ようやく自分をモデルにした胸像を良助は初めて見ることになったのだと思われます。頼み込まれて出資して制作してもらった銅像は、日程的に考えると、良助は一度も見ないままロンドンに旅立った可能性がたかく、さらに、その間に制作者の碌山は亡くなってしまい、一年以上たってようやく遠い欧州の地から帰ってきたわけです。本十さんとしては面目なかったことでしょうが、良助が帝国製帽株式会社と特約店契約を果たした絶頂期に、日本橋通塩町の植草屋に《宮内氏像》が設置されたのは幸いでした。もちろん、日英博覧会出品協会から戻された作品を植草屋に設置するなどの諸手配は、本十さんがやったものだと思います。

ところが、その三年後の大正三（一九一四）年に良助は破産します。帝国製帽と契約して辛亥革命前後に帽子を売りまくりますが、大正に入る頃より製品が余りだし、上海にあった倉庫に中折帽が大量に残ってしまい、処分できないまま破産に追い込まれたのでした。日本橋通塩町の土地と家屋を売ることで負債を整理し、浅草橋駅近くに小さい小さい店舗兼住居を借りますが、そこは本十さんの店舗近くなので本十さんに紹介してもらったのかもしれません。浅草橋駅一帯は戦災で焼けているものの、今でもだいたい同じ区画で建物が再建されているとのことで、店舗の跡地を見に行ったら、本当に小さくてびっくりしました。

そこで育った良助の孫の良雄やその妹のキクに聞いても、その店舗兼住宅に《宮内氏像》は存在していなかったといいます。家族と数人の使用人、さらに親類や知人の寄宿人がおり、どうやって布団を敷いていたのかもわからないくらい狭い家であったようで、《宮内氏像》を置くスペースなどどこにもなかったそうです。ですから日英博覧会から戻ってきて三年間は日本橋の大きな家に設置されていたのでしょうが、そのあ

と行方不明になってしまいます。《宮内氏像》がどこにあったか宮内家でもつかめていません。関東大震災後に南葛飾郡（昭和七年、東京市に編入）小岩町に建てた住居で、のちに良助の隠居所となる家は九百坪ほどの大きな敷地だったそうですが、そこにもなかったということです（写真⑪）。

ということで、浅草橋時代から二十八年のあいだ、《宮内氏像》は行方不明になってしまいます。そして、その間に、モデルでもあり出資者でもあった宮内家初代の良助は、昭和十（一九三五）年、満六十六歳で亡くなります。

写真⑪
宮内家一族・小岩の隠居所にて（前列中央の紋付の男性が良助）
昭和10年

旅はつづく

二十八年のあいだ所在がつかめない像が、再度、後世の私たちの前に登場するのは昭和十八（一九四三）年に宮内家が埼玉県の大宮駅近くに、疎開先として敷地面積三百坪もある大きな家に転居する直前です。六月二十八日、写真家の土門拳によって撮影されたと思われる写真（写真⑫）が、良助の長男である治良の遺品のなかに残されていました。そこには菩提寺の日暮里駅前にある本行寺の宮内家の墓地内に、立派な台座に載った《宮内氏像》が家族とともに写されていました。

この場所に《宮内氏像》がいつからあったかは不明ですが、治良は父良助の命日には必ず家族揃って墓参りをしていたので、この墓に像が長年置かれていれば、治良の妻や子供たちの記憶に残ったはずですが、父や叔母には全くそのような記憶はないそうなので、本行寺に設置されたのは、ほんの一時期のことだったと思われます。

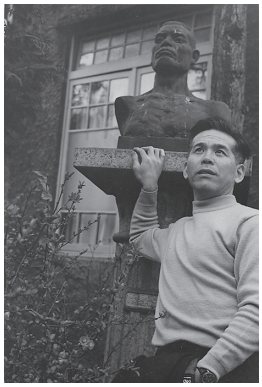
この撮影の二か月後の八月末には、浅草橋の店舗はそのままに、治良は疎開先として埼玉県の大宮駅近くの三百坪の借地に建つ家を購入し、九月末に妻のコトと小学生の二女のキクが《宮内氏像》とともに転居します。東京の学校に通っていた長男良雄・長女テル子・二男仙治は空襲が激しくなってから移り住み、治良は昭和二十年三月十日の東京大空襲で浅草橋の店舗が焼け落ちるまでは大宮の家とを行き来しながら商売をつづけていたようです。

戦後になり、作庭が趣味の治良の友人が庭づくりをしたいということでお願いします。大宮に運ばれ、金属供出を免れるために屋内に梱包されたまま置かれていた《宮内氏像》は、作庭後に応接間である洋館風の

写真⑫
本行寺の宮内家墓地に置かれた《宮内氏像》
昭和18年

窓の近くに設置された台座上に移されます。台座の周りにはボケの木やリュウゼツランなどが植えられ、ちょっとした顕彰コーナーのような場所になっていました。《宮内氏像》は一五〇センチ程の台座に乗せられ、宮内家の初代として威厳ある姿で子や孫たちを見下ろすように設置されたのでした（写真⑬）。そして三十六年のあいだ平安な日々がつづきます。

昭和五十四年、宮内家は大宮の家から東京のマンションに転居します。大宮駅前が都市再開発にともなって商業地に地目が変換され、住宅として住めなくなってしまったからです。《宮内氏像》、私たちの《おじいさん》は高い台座から下ろされ、お風呂場であちこちについていた鳥の糞などを洗い流されてキレイになり、東京信濃町のマンションのリビングルームのスピーカーの上に置かれます。その後、東京市谷のマンションに転居しますが、置かれる場所はスピーカー上と変わりなく、孫やひ孫が囲む食卓と同じ目線で過ごすようになりました（写真⑭）。



写真⑬
大宮の庭の《宮内氏像》と孫の良雄
昭和47年

写真⑭
市谷のマンションにて正月を祝う
平成23年

一昨年の二〇二〇年四月に良助の孫である私の父が亡くなり、生前から自分が亡くなったら寄贈するようにいわれており、昨年一月、こちらの碌山美術館にお引受けいただきました。こうして《おじいさん》の長い旅はおわりを迎えたわけです。

空白の二十八年間

ところで、大正三（一九一四）年から昭和十八（一九四三）年までの二十八年間、うちの《おじいさん》は、どこにいたのでしょうか。

『東京商人の生活と文化』を書き終え、その二十八年間の空白の存在を知った私は、平成三十（二〇一八）年の春に届いた『碌山美術館報』を見て、飛び上がるほど驚きました。館報に掲載されていた挿絵写真に《おじいさん》が写っていたのです（写真⑮）。大正四年に新宿中村屋に保管展示されていた碌山の作品が碌山の生家でもある長兄の十重十さんの家に移され、庭に別棟を建て碌山館と称して作品を公開していました。その内部を写した写真に《宮内氏像》が写っていました。モノクロ写真ですので石膏像との区別がつきにくいのですが、《宮内氏像》は石膏像と銅像の二体

写真⑮
荻原家にあった碌山館の作品群

が一枚の写真に写っているのですから間違いようがありません。早々に碌山美術館の学芸員の武井さんに問い合わせたところ、撮影年は不明だとのこと。勢い込んだ私としてはガックリと肩が落ちる気分でしたが、それでも手がかりを摑んだ思いで嬉しかったです。

宮内家の《宮内氏像》に関することは、ずっと本十さんのお宅が、対外的には窓口になっていたフシがあります。宮内家が破産し、抵当に入っていた日本橋の大きな家をなくしたとき、本十さんが借家の店舗を紹介してくれた可能性があります。ついでに、行き場を失った《宮内氏像》を、穂高の実家に設けられた碌山館が預かるという案を出したとも考えられます。

その後、疎開先とはいえ大宮駅近くの大きな庭をもつ家に移ることになり、ようやく《宮内氏像》を引き取ることにしたのでしょう。昭和十六年に公布された金属類回収令による金属供出の締め付けが戦況の悪化とともに強化されるなかで、碌山館で《宮内氏像》を持ちきれないという事情もあったのかもしれません。そうして、この穂高の地から東京に運び、一旦、菩提寺の本行寺に置き、そして大宮に移動させたと考えられます。大宮の家を決めるとき、本行寺の住職に相談したという経緯もあり、そうしたことで本行寺での記念撮影が行われたのかもしれません。

ちなみに、父からの情報では「おじいさんは自分で稼いでいた」という不思議な言い伝えが我が家にあるそうで、これが何を意味するのかも知りたいところです。また、良助の隠居所であった小岩の家は九百坪もの大きな敷地であったにもかかわらず、《宮内氏像》が置かれなかったことにも疑問が残ります。今後の解明に期待したいところです。

おわりに

《宮内氏像》は、彫刻家荻原碌山と日本橋の帽子卸商の宮内良助が出会うことで誕生した銅像です。この二人のあいだには、碌山の兄であり帽子付属商であった荻原本十がいました。もう一歩突き詰めていうならば、近代社会の多くの人々が求めた帽子という存在がなければ生まれなかった彫刻作品だといえましょう。しかも、碌山生前に鋳造された、たった二つの作品《北條虎吉像》と《宮内氏像》が、二つともに帽子が介在しているのですから、碌山彫刻は帽子という存在がなければ出現しなかったといっても過言ではありません。碌山を支援しつづけた本十さんが帽子商だから当然とはいえ、碌山が最も活躍した時代、帰国してから亡くなるまでのたった二年間が、日本の帽子業界が急速に拡大したときと一致していたからこそ生み出された作品だったといえます。もちろん十重十さんはじめ荻原家の兄弟仲が良く支援を惜しまなかったことや、中村屋サロンの存在も重要な要素ではありますが。

芸術作品は、その芸術そのものの歴史だけでなく、社会全体の動きのなかで考えていくとき、また違った側面からの姿が浮かび上がってくる一例といえましょう。

以上、雑駁ながら、これで私のはなしをおわりにいたします。

最後に、私たちの《おじいさん》、碌山生前の鋳造作品である《宮内氏像》を、私たち一家はお嫁に出すような気持ちで寄贈させていただきました。これまでおはなししてきたようにいろいろな旅をしてきた銅像ですが、この穂高の碌山美術館を安住の地として、末永く大切に保管し、かつ活用していただくことを願ってやみません。どうか《おじいさん》をよろしくお願い申し上げます。

ご清聴、ありがとうございました。

補注：講演終了後に、高村光太郎連翹忌運営委員会代表の小山弘明氏より、戦時中の金属供出をどう乗り切ったのかについてのご質問をいただきました。叔母（宮内キク）に問合せした結果を文字化するにあたって加筆しました。